

試験日 : 2025年2月24日
入試種別 : 大学院(博士課程)入学試験問題
学部・研究科 : 心理学研究科
科目名 : 専門科目

解答又は解答例

設問 I 【採点又は評価のポイント】

最初に、アカデミックな心理学のスタイルについて述べる。質問紙調査や心理学実験で考えてみる。質問紙は多くの人々のデータを一定の言語的な刺激への反応として収集し、数値化して量的なデータとなり統計的に処理される。実験でも、同じく物理的に一定の刺激への反応を数値で収集し統計的に処理される。例えば、手のひらに熱を加えた際のリアクションは、物質に対するリアクションと同様に数値化されるために、個人はあくまで受動的な存在である。そこに個別性が現れるかもしれない皮膚の過敏性や刺激への感受性は鑑みられない。性差、身長差、体重さ等ある程度の同一性は担保されるが、人間は一つの物体と同じように扱われるので、受け身的な存在となる。さらに、質問紙でも実験でも、観察者つまり調査者や実験者は、データに影響を与えない存在として扱われる。明かに刺激を与える人物なのであるが、透明な存在のように扱われる。このように、アカデミックな心理学におけるデータでは、人間の経験の普遍性を前提として、個人の特殊な経験をあえて排除している。そのデータは時間の経過によっても変化しない事実を構成するために用いられる。

一方で、臨床心理学におけるデータは、支援者と被支援者による事例である。臨床心理学的な立場によって認識が異なるかもしれないが、一般的に事例には被支援者の特殊性が現れ、その経験が大きく影響する。被支援者の人生もしくはその一部の語りの成立には時間的な経過が必須であり、それはストーリーを生み出す。それらのストーリーは支援者と被支援者のやり取りの中で生み出されるため、基本的には言語で表現される。言語は多義的なので、支援者の意図通りに進むものではなく、経過の中で語られるストーリーは思いもかけない被支援者の語りを引き出し、ストーリーの再著述に寄与する。被支援者はただ語るだけの存在ではなく、能動的な個人である。支援者はアカデミックな心理学のような観察者の立場にいるのではなく、被支援者とのストーリーを共同で生み出す立場である。

以上のように、アカデミックな心理学と臨床心理学のスタイルには大きな違いがある。それは、今後の心理学の研究方法の展開に大きな影響を与えられられる。

設問Ⅱ 【採点又は評価のポイント】

見立てについて

- ・これまでの経過を詳しく聞く中で、担任との間に特別な体験（例えば外傷的な体験）があるのかを確認していく。
- ・また、教員に対して、これまでどのような関りをしてきたのか、先生一般に対するネガティブな印象を持っているのか
- ・先生に限らず、大人一般に対して不信感があり、反抗的、否定的な感情を持っているのか
- ・大人に限らず、人に対して非常に極端な認識を持ち、了解することができないような発言が見られるのであれば、精神的な異常も視野に入れる。

関わりについて

- ・上で上げたさまざまな視点からの見立てに基づいて、

例えば担任との外傷的な体験があるのであれば、担任ではない教員が窓口の教員として関わり、本人との関係を構築していく。

教員一般についてネガティブであるのであれば、教員ではないスクールカウンセラーにつないでもらって、話をしたり、学外の専門機関にリファーも考える。

大人には否定的であるが、子ども同士は関係が取れるようであれば、本人が行きやすい子ども同士の関係ができる場所（教育支援センターやフリースクール）などで、子ども同士での関りを増やし、その中で大人への不信感等を和らげていく

さらに、精神的な異常が危惧されるようであれば、医療機関にリファーするようにする。

また、このような子どもの多様な視点からの理解を踏まえ、教員へのコンサルテーションを行い、子どもが関係をもてそうなところから関わっていくことを共通理解し、チームとして関わっていくことを検討する。